

保育における人形劇の史的検討Ⅲ — 雑誌「保育研究」によって普及活動をした山内勇仙 —

斉 藤 尚 子

(平成3年9月30日受理)

A Historical Review of the Puppet Play in Kindergarten III: Research on Yusen Yamanouchi, Popularizer the Puppet Play through the Magazine *Hoiku-Kenkyu*

Naoko SAITO

(Received September 30, 1991)

はじめに

本研究の目的は、保育における人形劇が、いつ頃、誰によって導入され、どのように普及していったのかを明らかにすることである。第一報¹⁾では、東京女子高等師範学校附属幼稚園の主事であった倉橋惣三が、大正12年頃に保育に初めて人形劇を導入したことについて報告した。第二報²⁾では、大正13年より東京・芝の増上寺託児所の主事となり、人形劇を始めた内山憲尚をとり上げた。彼は保育の中だけではなく、「子供の人形座」を結成しての公演や「東京人形劇研究所」を設立しての講習会、また多くの出版活動をするなど、人形劇普及に幅広く活躍した人物であった。倉橋惣三と、やや遅れはしたが、内山憲尚の二人は、保育における人形劇の先駆者であると言える。

今回は、人形劇を始めた年代ははっきりしないが、大正11年より福田会よくでんかい亀戸保育所(現・亀戸幼稚園)の主事となり、昭和7年から独力で発行した月刊誌「保育研究」によって、人形劇普及に貢献した山内勇仙やまのうちゆうせん(1893~1959)について報告をする。

主な資料は、東京から疎開先の飛騨高山へ運ばれたことにより焼失からまぬがれ、また数回に渡る園舎や家屋の改築にも損失することなく、亀戸幼稚園に残されていた雑誌「保育研究」と、長男・昭道氏(現園長・本学教授)編集の「亀戸幼稚園創立七十周年記念誌」(昭和62年発行)である。

1. おいたちと福田会亀戸保育所

保育者としての山内勇仙については「保育に生きた人
児童学科・保育科

々」³⁾の中に、岡田正章氏によって詳しく(第1章 雑誌『保育研究』の刊行、第2章 保育論—その特性と保育史上の位置—、第3章 生涯と保育への道)著されているが、ここではごく簡単に彼のおいたちについて触れておく。

山内勇仙は明治26年9月18日、飛騨高山において、父信之助(輔)、母せい(世伊)の次男として生まれ、幼名を曠(ひろし)といった。高山の小学校及び高等科を卒業し、岐阜県立斐太中学校に入学。この時から山内家の菩提寺である曹洞宗雲竜寺にて生活するようになった。幼い頃から絵を描くことが好きで、日本画家になりたいという希望をもっていた時もあった。中学を卒業した年に「勇仙」と改名。

その後大正2年上京し、曹洞宗第一中学校補習科、曹洞大学(駒沢大学)高等部をへて、大正4年に大学に入学。生涯を通じて親しく交流していた久留島武彦との出会いは、はっきりしていないが、大学時代とも考えられ、後に回字会のメンバーにもなっている。

大学を卒業した後、しばらく出版社や農商務省に勤務している。この頃は演劇に興味をもち、仕事が終ると新劇や歌舞伎を見て歩いたという。彼が雑誌などから切り取った戯曲、例えば中央公論に載った野上彌生子の戯曲や、小山内薫訳の明治座台本などが合本されて、現在も亀戸幼稚園に蔵書として残されている。

大正11年4月より、福田会亀戸保育所の主事となって保育にたずさわるが、ちょうどこの年は倉橋惣三が数々の人形劇と出会った欧米視察から帰ってきた年であった⁴⁾。

彼が勤務した「福田会は仏教思想にもとづく仏教者を中心とする慈善団体として明治十二年に育児院を設立し、墮胎防止、棄児救済を行なっ」⁵⁾でいた。亀戸保育所は、

大正6年9月30日の夜から翌10月1日の朝まで、台風による風雨と津波による洪水で災害を受けた子どもたちを救済するために設置された施設である。10月18日から天幕を使つての保育が開始され、大正8年に園舎が建てられたという。

山内がなぜ保育の世界に入ったかということについては、昭道氏が次のように記している。「当時、仏教者たちが、寺院の外での社会的活動へと活躍していた時代の人間として、福田会に勤務することになりました。福田会の専務理事北越戒定師が曹洞宗出身であったことによると考えられます」⁶⁾

2. 人形劇とのかかわり

山内勇仙がいつ頃から人形劇に興味を持ったのか、また何年頃から人形劇を始めたかについては不明である。ただ次のような事柄が推察できると思う。

彼が生まれ育った飛騨高山は、かつては天領であり、山々に囲まれてはいるが豊かな土地柄で、匠の街でもあった。高山祭りに引き廻される山車の上部にはからくり人形が取り付けられているし、人々が集まる街ならば、人形浄瑠璃の一座が巡業にやってきた可能性もあるだろう。つまり、動く人形を幼い頃から目にする環境にあった。

また、演劇に興味を持っていたならば、築地小劇場で演じられた、伊藤喜朔や千田是也氏らの「人形座」の公演や、その他の新興人形劇を見ていた可能性もあるのではないだろうか。

当然、倉橋惣三や保姆たちが演じた「お茶の水人形座」の人形劇や、内山憲尚の人形劇を見聞きしていたであろう。それは「保育研究」の創刊号に、倉橋の人形劇についての講演を要約した記事を書いていることから明らかである。

さらに、幼い頃から絵を描くことが好きであり、雑誌「保育研究」の中にも自作のカットを載せているが、ギョーの顔を筆で描いたり、舞台の背景を描いたりすることに容易に取り組むことができたと考えられる。

そして、彼が勤務する以前より亀戸保育所の保姆であったという池谷花子（後に宮本華、戦後田無幼稚園を設置）は、女人童話会の会員であり、内山憲尚の「子供の人形座」の公演にも参加していることから、池谷の存在も何か影響を与えたかも知れない。

3. 雑誌「保育研究」

亀戸保育所は、福田会からの補助金によって運営されていたが、昭和に入って徐々に不景気となっていた為、経営を安定させるべく、昭和4年保育所から幼稚園へ転換された。しかしその後も世界恐慌のあおりで、福田会理事会は幼稚園を廃止、または他へ譲渡することを決定。そこで山内はこれまでの赤字を引き受け、自分が経営することで亀戸幼稚園を存続させることを決意した。

昭和7年4月、福田会より譲渡される際に連帯保証人となってくれたのは、子どもの頃お世話になった雲竜寺住職の林孝道と、妻千代子の兄後藤義郎である。⁷⁾

この同じ年の1月15日に創刊したのが月刊「保育研究」である。世の中は不景気であり、しかも福田会の補助金がなくなって、経営が大変な中での発行であった。

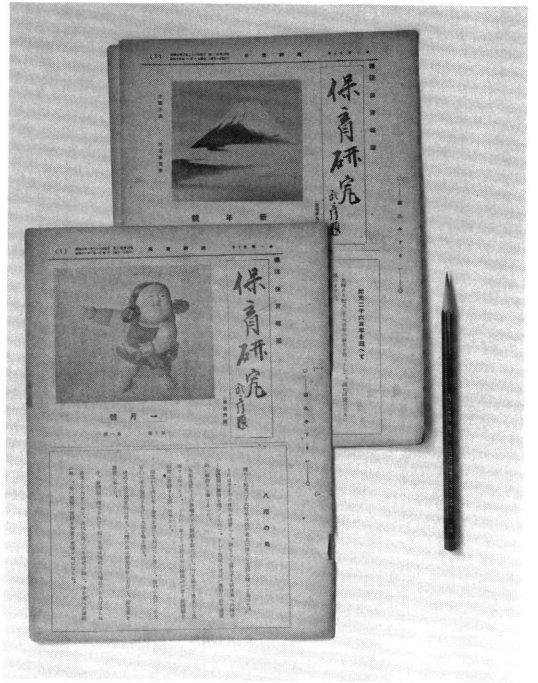


写真1 雑誌「保育研究」

「保育研究」はB4よりやや大きめの紙3枚に両面印刷、新聞のようにとじることなく2つ折にされ、12ページで構成されている。1部10銭送料2銭（第4号から送

料5厘に変更、第8巻9月号より13銭に値上げするが送料は同じで、当時唯一の保育雑誌であった「幼児の教育」（フレーベル館）は、1冊75ページで35銭送料1銭である。

発行を「保育研究社」としていたり、第2巻から「本社顧問」として久留島武彦（早蕨幼稚園長）、和田実（目白幼稚園長・同保母養成所長）、倉橋惣三（女子高等師範学校教授・附属幼稚園主事）、土川五郎（瑞穂幼稚園長・東京昭和保母養成所長）、卜部たみ（前女子師範学校附属幼稚園主任保母）、朝原梅一（東京府社会事業主事）、北越戒定（宮代幼稚園長）の名前が各号に印刷されているが、全くの独力によって編集から発送までを行っていた。

毎号1000部印刷され、約700部が発送されていたが、昭和7年の創刊号（1月号）から11月号までは「売捌所フレーベル館・國母社」の文字が見られることから、当初はフレーベル館や國母社がその販売に協力していたことがわかる。購読料が送金されてくると受領報告として誌面に地名・所属・氏名を掲載していたため、読者が北海道から九州まで各地に渡っており、さらに台湾、朝鮮、満州、サイパン、パラオにも及んでいたことが認められた。例えば第1巻5月号には、小倉市愛國護法永照寺婦人会託児所、北海道・近文北鎮幼稚園、朝鮮・新義州幼稚園、台湾・台南花園幼稚園、台中員林幼稚園などの記載があり、第2巻2月号には南満州互房店幼稚園、同3月号には大連市南沙河口幼稚園、第6巻8月号にはスラバヤ宮平京子、第7巻3月号には南パラオベリリュウ磯稔の記載が発見できた。

「保育研究」の発刊目的は、第2号に「本誌の使命」として載せられているので引用する。

「保育の事業は未だ日本では日が浅い為にその研究も僅かに夏期の講習や臨時の講習位で、纏まった研究の本は未だ充分出来ておりません。それで是に従事せらるゝ保母さん達はその教材に困って居らるゝのであります。本誌は幾分でもこの点を補はんが為に生まれたものであります。尚各幼稚園の聯絡にもつとめ、各種事業の紹介の外、就職を希望せらるゝ保母さん達にも御便利の様に無料で紹介の労をとる事に致しております。何卒御遠慮なく本誌を御利用下さる様御願いたします。」

以上のような目的にそって、内容は保育に役立つような童話（彼の創作も数多く含む）、遊戯、保育案、行事、季節の植物などが載せられた。1ページ目を飾る写真は

園児の姿の外、日本画や彫刻の写真が使われているが、これは絵の好きだった彼が、上野の美術館や三越デパートの美術展に出かけた時に購入してきたカードや写真であった。また、「YY」という彼のイニシャルのサインが入ったカットもたびたび登場している。

ここでは、「保育研究」の中に見られる人形劇に関する記事に注目し、述べていくこととする。

4. 「保育研究」と人形劇

まずは、創刊号の第2ページに「幼児保育と人形芝居について」という題で、倉橋惣三の講演を山内が聞いてまとめた文章が載っている。これは前年昭和6年11月25～27日の3日間、西窓学園託児部が主催し、大塚市民館を会場に夜間に開かれた「人形芝居講習会」に山内も参加していたことを示す。「幼児保育と人形芝居について」は、その第1日目に行われた倉橋の演題である。1日目には他に、お茶の水幼稚園保母らによる人形劇の実演「舌切り雀」と「猿蟹合戦」があり、2日目には及川ふみ保母の人形製作指導、3日目は製作の続きと、菊池ふじの保母の実演指導だった。この講習会のことについては「幼児の教育」第31巻（昭6）12月号に、西窓学園の牧賢一が書いた「託児所に於ける人形芝居の採り入れに就いて」に記録されている。また、この講習会で作ったのは猿蟹合戦のギニョールで、同じ「幼児の教育」に及川ふみが型紙を載せて、このギニョール^{かしら}の作り方の文章を書いているが、画用紙や模造紙を頭の材料に使ったものであった。

「保育研究」の創刊号には他に、彼が脚色した人形劇の脚本「桃太郎」があり、2月号には「田舎の鼠と都会の鼠」がある。そして、10月号からは「幼児の人形芝居講座」が9回に渡って連載されたのである。以下はその内容。

- 講座(1) 緒論 一、童話と人形芝居 二、紙芝居と人形芝居 本論 幼児と原始人 人形について
講座(2) 舞台について 幕について 背景 伴奏について 終りに

* (1), (2)とも短い文章でまとめられている

講座(3) 舞台の造り方

講座(4) 幕の造り方 一、幕の効用 二、幕の種類 三、幕の布地

講座(5) 人形について(一) 人形の作り方 一、紙にて作るもの 着物について

講座(6) 人形について□ 二. 布にて造るもの イ.
人物 ロ. 獣類 三. その他の応用 A. 箱
人形 B. 卵殻人形 C. その他

講座(7) 背景について 一. 幕 二. 背景

講座(8) 実演について

講座(9) 脚本について

講座の(3)~(8)には、それぞれ手描きの図が加えられ、説明されている。講座(8)に描かれている人形の扱い方の図は、人形を手にはめる形を描いているが、描かれている絵は左手である。彼が自分の左手で指の形をつくり、それを見ながら右手で絵を描いている様子が目に浮かぶようでおもしろい。

講座(9)の最後には「未完」の文字が入っているが、これ以降に人形芝居講座の掲載はなかった。しかし、これだけでも人形劇の全般に渡る製作方法が示されていると言える。

昭和7年のこの頃には、すでにフレーベル館より人形劇用の舞台も人形も背景も販売されていたが、「所謂幼稚園らしい人形芝居の普及を計り度いと存じます。舞台

も人形も手製にすれば費用もやすくてすみます。何卒講習会を御開き下さいませ。実費で講師を派遣致します」⁸⁾とコマーシャルを掲載し、自分で作ことをすすめていた。

また同じ昭和7年には、「人形芝居脚本集」を2冊発行している。どちらもB6版、50ページ前後の小冊子であり、1冊30銭で2冊買うと50銭に割引して販売していた。それぞれに4本づつ脚本を載せているが、第一号には「舌切雀」、「田舎の鼠と都会の鼠」(イソップ物語)、「五色の鹿」(仏典中の「七色の鹿」を翻案したもの)、「浦島太郎」、第2号には「桃太郎」、「狸ばやし」、「猿蟹合戦」、「神様と木樵」(イソップ物語)である。2冊の脚本集の印刷は、雑誌「保育研究」と同じ印刷所で行われているが、この印刷所は福田会育児院の中にあり、育児院出身だった松井吉栄によって印刷されていた(昭道氏談)。「人形芝居脚本集」の広告は「保育研究」の中にたびたび掲載されている。(「保育研究」の印刷は、第8巻6月号より松井が病気となった為、亀戸町の永井三法社に変わった)

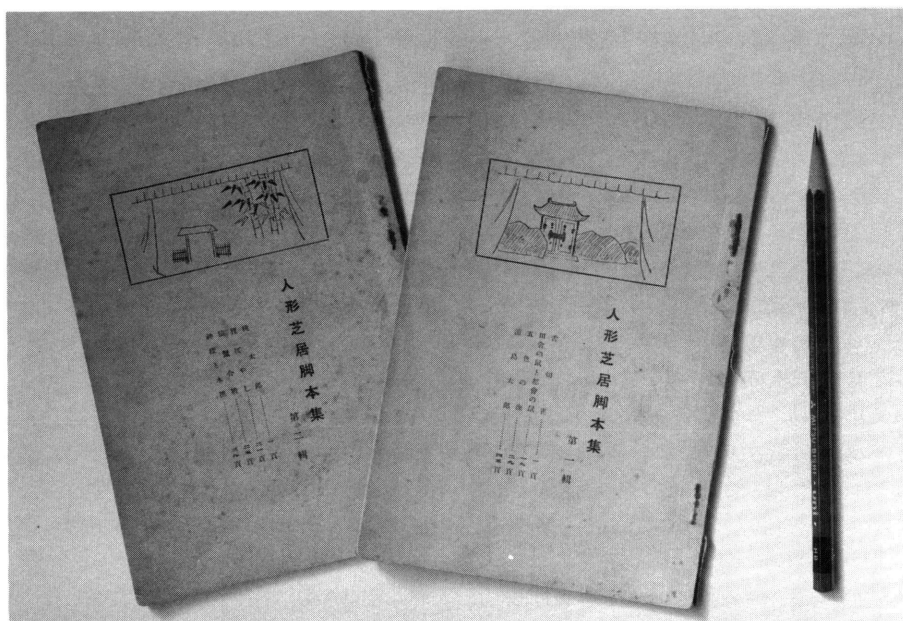


写真2 「人形芝居脚本集」

その後の人形劇脚本については、第2巻(昭8)4月号に「花咲爺」、第4巻(昭10)10月号「月の兎」、第7巻(昭13)1月号「はたらくもの」(イソップ物語)、同2月号「やたらす因幡の白兎」、最後の脚本は第9巻(昭15)2月号の「八咫鳥」(神話)で、紙に絵を描き切り抜いて人形にするという芝居になっていた。

彼の脚本は、童謡が組み入れられていたり、レコードを使って効果を出すなど、どの脚本も音楽を取り入れた演出になっているのが特徴といえる。例えば「田舎の鼠と都会の鼠」では、初めに、

表はころころ

お庫にどっさりこ

お米はどっさりこ

チュチュねずみはニコニコ

—— 歌の途中より幕を上げる ——

となっている。「五色の鹿」では「証城寺の狸囃の蓄音機をかけて、中程で静かに幕を開ける」とあり、狸が踊っている場面から始まっている。また「猿蟹合戦」では登場した猿と蟹が「靴がなる」の歌をうたいながら散歩するという演出になっているし、「因幡の白兎」では最後に大国と白兎と一緒に踊って—— ゆっくり幕 ——とされ、踊りの曲は「なるべく民謡風のものがあれば結構ですが、唱歌でも、童謡でもいいでしょう。この場合はなるべくかたい唱歌風のものよりも、くだけたものの方がより効果的と存じます。ご工夫を御願ひ致しましょう」と、〔演出について〕のところで述べている。お茶の水幼稚園の2人の保姆が書いた脚本集⁹⁾の中にも、「舌切雀」「一寸法師」など童謡を取り入れた脚本はあるが、山内のように全部に音楽が入っているわけではない。内山憲尚(当時憲堂)が昭和7年に出した脚本集¹⁰⁾も、7本の脚本のうちレコードを使っているのは「舌切雀」の始まりの部分だけである。

5. 講習会による普及活動

山内勇仙は「保育研究」創刊以前にも講習会を行っていたようだが、その内容や期日については不明である。「保育研究」の中には、彼が企画した講習会の案内や、活動報告が記録されているため、彼の行動がよくわかる。講習会の内容は、人形劇の他、手技、遊戯、童話、童画などで、人形劇に関しては特に昭和7年に集中している。以下に示す月日と場所は同年に彼が人形劇の講習を行った記録である。

3月28-29日 東京小石川・伝通会館

6月4日 同上

6月5日 群馬県・宇都宮幼稚園

6月12日 富山市・光厳寺幼稚園

7月3日 京都・永観堂幼稚園 } 名古屋でも講習
7月5日 大阪市・芦池幼稚園 } した可能性あり

7月27-29日 亀戸幼稚園

9月中旬 横浜市

10月1・2日 福島県・喜多方幼稚園

(10月3日 “ ・若松幼稚園の人形劇を見る)

以上であるが、個人で幼稚園を経営しながら雑誌を編集し、これだけ人形劇普及のために行動したエネルギーは驚くに値する。

上記にある亀戸幼稚園を会場に行った講習会の案内には、次のように記されていた。

「人形芝居は保育上多大の効果ある事は已に御承知の通りであります。更に一步を進めて、手技の時間に幼児と共に人形を製作し、実演したら、その興味は又言外の効果齎します。本社は茲に多年研究して得た各種の人形及び舞台、背景等を懇切に披歴して人形芝居の普及と発達に努力致しております。今回発表致しますのは今までの講習会に発表しないものであります。」¹¹⁾

この文章から、保育者が演じて見せるだけでなく、園児たちにも人形を作らせて一緒に人形劇を楽しんでいたことがわかる。また、彼が作った人形、舞台、背景が亀戸幼稚園に実際にあったことが証明される。残念ながら現在では、数個の人形以外は残っていない。

翌8年になると、かねてより念願であった朝鮮・満洲にも出かけて人形劇の講習会を行った。5月6日に東京を出発し、翌日奈良市立託児所にて人形劇の講習会を実施。5月9日に下関から関釜連絡船に乗って出発している。以下はその報告¹²⁾より、期日と講習会場となった幼稚園名である。

5月11・12日 釜山公立幼稚園

5月15・16日 京城・愛国婦人会京城幼稚園

5月23・24日 大連・北公園幼稚園

5月31日、6月1日 奉天・春日幼稚園、千代田幼稚園

この講習会には、幼稚園・託児所の保姆だけではなく小学校の教員も参加していた。また上記以外の幼稚園においても、口演童話を行ったり、「母の会」で講演をしている。

朝鮮・満州に出かけるにあたっては、ちょっとおもしろい記録¹³⁾がある。この年は不景気のために、幼稚園へ入れる家庭が減ってしまい、亀戸幼稚園の園児は50名程度となってしまった。「園児は、少ないし、ちょうどいい機会だから、行きたがっている満州へ行ってらっしゃい」と千代子夫人が言ったという。彼も「それも、そうだ」と思って出かけたそうである。行った先での講習会や講演会の謝礼金は、そのまま旅費と変わったのであった。

他にも何度か人形劇の講習会に出かけているが、「保育研究」に見られる最後の記録は、昭和12年6月13日岡山市出石幼稚園、6月14日には倉敷市御国幼稚園の母の会講話終了後に「舌切雀」を余興として演じて見せる、6月15・16日広島市光道幼稚園、6月18日山口県小郡幼稚園、それぞれの幼稚園を会場に近隣の保育者が参加して行われた¹⁴⁾。

人形劇の講習会については以上であるが、彼は自分の

幼稚園を会場に講師を呼んで遊戯や童話、童画などの講習会を行ったり、仏教保育協会の講習会に協力していた。また、あちこちの「母の会」に呼ばれて講演をしたり、童話を語ったりしている。「保育研究」には、久留島武彦を中心とする回字会のメンバーと一緒に出かけた旅行記なども書かれているが、山内自身出かけることが好きであったと思われる。そして彼の留守を守り、保育をし、「満州へ行ってらっしゃい」とさりとて言う妻千代子の援助も見逃すことができないであろう。

6. 残っていたギニョール

写真は、小さなトランクに入り、疎開先にも運ばれて亀戸幼稚園に残っていたギニョールである。大きさを示すため新しい鉛筆と一緒に写した。写真に載せた他にも罎者で顔がまだ描かれていないものなど、数個のギニョールが残っていた。



写真3 残っていたギニョール



写真4 残っていたギニョール

これらの人形の形は、「保育研究」の中に掲載された「幼児の人形芝居講座」に記されていた作りと同じであり、山内勇仙が講習会に持って歩いたものであろう。

人物の頭は、誰でも作れるような「お手玉」を作るのと同じ方法¹⁵⁾で、白い木綿地を輪にし、綿をつめて上下を縫い縮めてある。顔は墨や絵の具を使って描かれている。お爺さんの人形には、紙を丸めた首管がついているが、他には竹製の管を利用したものが1個で、他の人形には首管がなく指が頭の中に入る程度に縫い縮めてある。

雀の人形は紙を切り抜いて、さらに和紙を貼って着色し、目や口ばしには色紙を使っている。

動物や番者の手の形は、先に記した及川ふみ保姆のギニョールの手と同じ形をしているが、お爺さんの手は、薄い紙を丸めた管が入っている。

これらの人形を見ながら「オヤジが針を持って縫うはずがないから、オフクロに指示して縫ってもらい、仕上げに顔を描いていたのだろう。このお爺さんの人形の顔は、オヤジにそっくりだよ」と昭道氏は述べた。

このお爺さんと雀のギニョールは、たぶん「舌切雀」に使用したものと思われるが、当時亀戸幼稚園児であった昭道氏の思い出の中に、父勇仙が人形劇を演じていた

記憶も亀戸幼稚園の保姆が演じていた記憶もないのは、真に残念である。

おわりに

昭和12年第6巻の1月号に載せた彼の挨拶文には、どんな気持ちで「保育研究」の発行を続けてきたのかということが語られているので、少し長いが引用する。

「小誌も創刊以来、方に五周年を経て、今年から第六巻となりました。

六才と云へば幼稚園では大威張りの歳であります。それまでよく支障なく育ったものであります。

思へば発刊に際し、支持者が応援不能になった為、折角編輯した原稿を抱いて途方に暮れ、遂に意を決して恐る恐る印刷所へ頼みに行った往時を追憶して感慨無量であります。

更に、昨年は三ヶ月に亘る病魔に悩まされながらも、発刊は休みませんでした。そして、遂々、こゝまで漕ぎつけました。石の上にも三年と云ひますが、五年を経た今日でも未だ石の上に居る感じです。

ともあれ五年の歳月は漸く行く手を指し示してくれま

した。たとへ小さい仕事でも精一杯の努力を以って続けて行き度いと存じます。そして、少しでも皆様の御役にたてば、本懐至極であります。

喜しい事には殆んどの愛読者諸賢が創刊以来の方が多い事です。

何卒、この上とも、より以上の御援助と御教示とを仰ぎ度と存じます。」

12ページの小さな月刊雑誌「保育研究」は、山内勇仙が一人で編集し、原稿を書き、宛名書きから発送までを行っていた。昭道氏の話では、「保育研究」の印刷が上がってくると、家族みんなでこれを折り、すでに宛名書きの終わっている帯封をかけていく。そして部屋の畳の上いっばいに並べて、確認のために父勇仙が読み上げる住所と名前ものをカルタとりのように拾っていった。このおかげでずいぶん文字と地名を覚えたという。そして大きな風呂敷にこれを包んで郵便局へ運び（1回では運びきれなかった）、自分たちで「領金別納」のゴム印を押して発送したそうである。

「子供の人形座」を創ったり、ラジオ放送に出演したり、数々の著書を著した内山憲尚の華々しい活躍に比べると、彼の普及活動は地味なものであった。しかし、日

本の全国各地、そして朝鮮、満州、南洋の島にもいた「保育研究」の読者を通して、保育における人形劇の普及に貢献したと言えるであろう。

また、この雑誌が創刊された昭和7年は、「子供の人形座」が公演活動を開始したり、雑誌「童話研究」が1号と5号に人形劇特集号を組んだりと、人形劇がたいへん盛んになった年であった。「保育研究」でも昭和7年8年に、人形劇の関連記事が多く見られ、山内も講習会にあちこち（朝鮮・満州も含）出かけているが、その後は急に少なくなってしまっている。お茶の水人形座でも「出征・戦場」¹⁶⁾が演じられたり、山内も神話を脚色した「八咫鳥」を載せたりしており、保育の人形劇にも戦争の影が見られるようになっていくのである。

以上のように地味ではあっても、大変な努力、労力を払って発行を続けてきた「保育研究」だったが、紙不足を理由に、政府情報局の命令で昭和16年第10巻9月号（通算で113号）をもって発刊中止となってしまった。

ただし、戦後10年がすぎ、久留島武彦からのすすめもあって昭和30年に「第11巻」として再刊したのである。（しかし、昭和31年8月31日9月号を発送後発病し、昭道氏が10月号、11・12月合併号を発刊して休刊となった）

山内勇仙略年譜	
明26	岐阜県高山に生まれる 幼名は曠（ひろし）
明33（7才）	高山尋常高等小学校入学
明40（14）	同校卒業。岐阜県立斐太中学校入学。雲竜寺にて生活するようになる
明45（19）	同校卒業。12月勇仙に改名
大2（20）	上京し、曹洞宗第一中学校補習科入学
大3（21）	同校卒業、曹洞宗（駒沢）大学高等部入学
大4（22）	7月同校卒業し、9月大学部に入学 この頃、久留島武彦と出会う
大7（25）	7月同大学卒業。出版社にしばらく勤務
大8（26）	農商務省農務局に勤務
大11（29）	（財）福田会亀戸保育所の主事となる
大12（30）	関東大震災に会うが、倒壊をまぬがれたので被災者の救護所となり、一時休園
大13（31）	後藤千代子と結婚
昭3（35）	日本仏教保育協会設立に参画。この頃からボイスカウトに興味を持ち、指導者養成にもあたる
昭4（36）	保育所改め幼稚園として認可を受ける
昭7（39）	月刊誌「保育研究」創刊。福田会より幼稚園を譲渡される。人形劇や童話の講習会で各地に出かける。「人形芝居脚本集」第1号、第2号発行
昭8（40）	福田会亀戸幼稚園から「亀戸幼稚園」とする。朝鮮・満州へ人形劇の講習に出かける

昭13（45）	東京私立幼稚園連盟を成立、常任幹事となる。5/29～6/20内山憲堂、加藤武夫と共に中国へ日本軍慰問に出かけ、紙芝居を演じる
昭15（47）	「保育研究」7月号で通巻100号となる
昭16（48）	高山に考道幼稚園設立（現在市立考道保育園） 「保育研究」9月号をもって発刊中止 「日本保育道」1～3号を発刊
昭17（49）	幼稚園閉鎖令を受け、6月高山の考道幼稚園へ疎開
昭20（52）	空襲で亀戸幼稚園焼失、考道幼稚園も市民が郊外へ疎開してしまった為自然消滅
昭23（55）	6月上京、幼稚園の再建を決意 9月よしず張りの園舎で保育を開始する 12月新園舎完成
昭24（56）	東京私立幼稚園協会理事
昭25（57）	この頃聖徳学園、東京教育専修学校の講師となる
昭27（59）	墨田幼稚園園長となる（昭32.3月まで） 日本仏教保育協会理事長
昭28（60）	駒沢高等保育学校講師
昭30（62）	4月「保育研究」再刊
昭31（63）	「保育研究」9月号発送後、入院（12月末まで） 長男昭道氏が10月号、11・12月合併号を出して休刊となる
昭34（65）	4月21日脳溢血のため遽化

本文中、物故者の方につきましては敬称を略させていただいたこととお断りし、お詫びといたします。

本研究にあたりまして、多大なるご協力、ご指導をいただきました本学の山内昭道教授に深く感謝の意を表します。

本研究の概要は、日本保育学会第44回大会において発表いたしました。尚、人形劇の人形のつくりについては、山内昭道教授と協同研究し、日本家政学会第41、42回において発表いたしました。

註

- 1) 齊藤尚子：東京家政大学研究紀要，29 63-69（1989）
- 2) 齊藤尚子：東京家政大学研究紀要，30 73-80（1990）
- 3) 岡田正章・穴戸健夫・水野浩志編：保育に生きた人々，風媒社（名古屋），1975 pp. 281 - 296
- 4) 略歴をまとめるにあたっては、山内勇仙著，山内昭道編：幼稚園教育論（亀戸幼稚園六十周年記念出版）1978，pp. 331-351を参考にした。
- 5) 註4)の文献 pp. 333-334
- 6) 山内昭道編集：亀戸幼稚園創立七十周年記念誌，学校法人山内学園（東京），1987，p. 35
- 7) 註6)の文献 p. 73に承諾書のコピーが掲載
- 8) 第1巻5月号
- 9) 菊池ふじの，徳久孝子：幼児のための人形芝居脚本，フレーベル館（東京），1930
- 10) 内山憲堂：子供のための人形劇脚本，文化書房（東京），1932
- 11) 第1巻7月号
- 12) 第2巻7月号
- 13) 註6)の文献 p. 76
- 14) 第6巻8月号
- 15) 第2巻3月号
- 16) 菊池ふじの：復刻・幼児の教育，39，8・9号，79-86